

学生、教職員のみなさんへ

2020. 11. 30

学長 谷岡郁子

学内での PCR 検査が始まって2ヵ月余り。

これまでに検査を受けた人が千名を超え、延べの検査数は1200件を超えました。

当初の段階では、判定の難しさに遭遇する場面もあり、偽陽性を避けるために同じ人に検査を繰り返すようなこともありましたが、今は経験を積んで自信のある判定が可能になってきたと思います。学生、教職員の方のこれまでの協力に感謝します。

もちろん、成果を上げている検査チームには最大の感謝です。

結果ですが、これまでの学内検査で明らかになった陽性者は教職員2名と学生1名です。検査時点では3人とも無症状でした。この検査で無症状のうちに感染を発見できたことで、その後のキャンパスでの拡大を防げたと思います。安全は守られています。

いずれのケースでも、保健所が濃厚接触者としなかった人々についても、大学として感染の可能性があるかもしれないと判断した人々は、全員改めて検査しました。

学内検査以外でも、家庭内感染をはじめこの間に陽性となった人が4名いますが、全員早い段階で自ら大学に報告してくれて、その後の調査にも協力してもらっています。

皆さんに理解してもらいたいのは、陽性になった人々、濃厚接触者となった人々によって、キャンパスの安全、私たちの安全が守られているということです。この人々が検査を拒否し、自ら申し出て協力していなければ、今頃、学内にクラスターができていた可能性があります。この人々が自らを隔離することでウィルスを私たちから遠ざけ、調査に協力してくれているから、私たちは感染の可能性のひとつひとつと闘うことができます。

自らを隔離して陽性になった人々は体内のウィルスをやっつけてくれます。こうして、陰性になって戻ってくるときには多くの場合、抗体をもって自分自身と周りの人々を守れる状態になっています。つまり接触しても安全な人です。

それにも拘らず、これらの人々は、例外なく辛い思いを抱えます。

頭では自分自身が陰性になって人々を感染させることがないとわかっているにもかかわらず、他の人に近づいてはいけないように感じてしまいます。他の人々が自分のことをどう思っているのかと怖くなり、どう言われているのかが気になってしまいます。

コロナウィルスは特に若者にとっては、身体以上に心に傷を負わせるものだということが明らかになってきていると感じます。

至学館大学は小さな大学ですから、私たちがどんなに個人情報を守っても、陽性者を推測できてしまうことがあるかもしれません。だから皆さんにお願いします。差別ではなく共感を、そして疑いではなくいたわりをもって仲間と共にありましょう。支え合いましょう。

特別なことは何もしなくていいです。これまで皆さんは見事に対応してきました。
私は、至学館の仲間を心から誇らしく思います。これからも、その冷静な態度を続けてください。予防に必要なことをしっかりやりつつも明るく元気でいてください。
そして、互いに助け合ってください。

今は、ほんとうにどこにでもウイルスがあるような状況ですから、感染した不安を感じたらすぐ相談してください。これまでも、多くの人々がそうしてくれています。そして検査を受けて陰性だったことで安心しています。自分自身が陽性でなくても、濃厚接触者になったという学生を含め、失った授業の補習措置や試験への配慮は行っています。迷ったら相談してください。

いつ緊急事態宣言が出てもおかしくないような状況になっていますが、私たちはいつでもリモートに切り替えることができるよう準備をしながらも、当面は今の皆さんのキャンパスライフを守っていくことにしています。方針を変える必要があれば、すぐ対応し、その旨皆さんに伝えますので注意してください。